
桐の枝に止まる鷹

深海魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桐の枝に止まる鷹

【Nコード】

N4779BA

【作者名】

深海魚

【あらすじ】

葵さんの結婚ショックでとある女性と関係しちゃった雁夜おじさん。一夜限りのつもりが、その一回で妊娠しちゃってさあ大変。正史とは違って父親になった雁夜おじさんと、大人の精神を持って生まれてきちゃった子供のお話。こんなあらすじですが、シリアスです。

間桐雁夜の一夜の過ち（前書き）

この小説には、以下の成分が含まれます。

- ・緩和しきれなかったウロブチン
- ・どうにもならないほどに濃かった鬱
- ・それでも頑張って詰め込んだ作者の妄想

それでもよろしければ、ご覧ください。

間桐雁夜の一夜の過ち

間桐雁夜まどうかりやには、今もなお心底惚れている幼馴染がいる。

かつての名を、禅城葵ぜんじょうあおい。かつては魔術師の家系であったが、いまは没落している家系だ。

ただ、やはり元を辿れば魔術師の家系である。なにか因縁でもあったのか、雁夜と葵は幼馴染として出会った。

そして、雁夜は葵に惚れた。

それからは他の誰よりも長い時間を共に過ごし、それなのに別の男に負けた。

魔術師の名門、遠坂家当主である遠坂時臣とさかときおみが、葵にプロポーズしたのだ。

魔術師の家に嫁げば、魔道に関わることは避けられない。葵も、その子供たちも、普通の幸せな生活は送れないだろう。

自分のためか、葵のためかも分からない。それでも激情に駆られて葵の元へと向かった雁夜は、彼女の顔を見て敗北を悟り、それでも理解しきれず、諦めきれず、問いを投げかけはしたが、身を退いた。

葵もまた、時臣を憎からず思っていることが分かったからだ。

自分がここで秘めていた想いをぶつけければ、彼女は友情と恋慕の狭間で苦悩するだけだ。ならば、いっそ

そう考えた雁夜は、逃げるようにその場から立ち去った。

その夜、雁夜は飲み明かしていた。

あちらこちらの酒場を渡り歩き、前後不覚になるまで浴びるよう

に酒を飲んだ。

明日は仕事？ 酒の飲みすぎは毒？ んなもん知るか
長年の初恋は実らず、完膚なきまでに敗北を突き付けられた雁夜
は、半ば自棄になっていた。

ただ、今だけは、なにもかも忘れてしまいたかった。

やがてはしごも四件目に達し、雁夜はバーにいた。

酒ばかり飲んでいたせいだろう、尿意を覚えた雁夜はトイレに向かい、手早く用を済ませてすっきりしたところで、手洗い場の鏡に映った自分の顔を見る。

酒で酩酊し、真っ赤になった顔。

髪はいつの間にか濡れてぼさぼさになり、しかもどこかで酒を被りでもしたのか、妙に酒臭い。ひよっとすると自分の息のせいかも知れないが。

ズボンや上着にも新しい汚れがついていた。鼻を寄せてみれば、ゴミ捨て場特有の悪臭がする。

「……酷い様だな」

そつ口に出して、自分の惨めさを嘲笑った。

好きな女と十数年という時間を共にしておきながら、最後の最後で横取りされてしまった自分が、情けなくて仕方がなかった。

こつとして酒に逃げながら、明日になれば全てはただの悪夢で終わるのではないかと馬鹿な望みを抱く自分が、女々しくて仕方なかった。

トイレから出て再び席に着く雁夜を、カウンターの内側に立つ店員が迷惑そうに見る。

ひよっとすると雁夜の被害妄想にすぎないのかもしれない。しかし、完全に酔っ払ってしまった雁夜には現実と幻の区別すらつかなかった。

いや、それどころか、

(どいつも、こいつも……俺を唾ってやがる……)

今の雁夜には、そんな光景すら見え始めていた。

たしかに、一部の客や店員から好意的とは言い難い視線を向けられていたのは事実である。しかし、決して嘲笑う理由などどこにもないし、むしろ目を合わせないようにしていたくらいだ。

だが、今の雁夜には関係がない。僅かな悪意や軽蔑の視線は雁夜の中に眠る自嘲と結びつき、それが心の奥底に眠っていた憎悪や嫉妬とさらに結びつき、アルコールによる思考力の低下がそれを助長する。

そして古今東西、酔っ払いに激情を足して起こることは決まっている。

「唾つな……」

「え？」

当然、店員からすればなんのことも分からない。聞き返すのは至極当然のことだ。が、今の雁夜にとってそれは火に油を注ぐ行為である。

ついに臨界点を勝手に超えた雁夜は、店員の胸倉を掴んで引き寄せ

る。
「俺を、唾つなあああつ!!」

「ガッ!？」

そして、思いっきり顔面を殴り飛ばした。

雁夜は、それなりに筋力がある。店員は殴られた勢いで後ろの棚にぶつかり、落下してきた多量の酒瓶による追撃を受けて沈黙した。

それを見て、しまった、と思ったのは雁夜である。一時の昂ぶりが治まった今、自分がどれだけ醜い行為をしたのかが分かりすぎる程に分かった。

「あ……す、すまない！ 大丈夫か！？」

酒瓶とはいえ、打ち所が悪ければどうなるか分からない。最悪の事態を考え、思わず雁夜は顔面蒼白になった。おそろおそろ声をかけると、

「大丈夫なわけがないでしょ？ なにやってるのよ、貴方は」

背後から唐突に声をかけられた。

聞き覚えのある声に一瞬だけ固まり、ゆっくりと振り返る。

案の定、よく知った顔の女性が立っていた。

長い黒髪を背中できくり、白いワンピース姿で佇んでいる。

清楚なはずの衣装は、女性自身が放つ女豹のような空気で別種の印象を抱かせた。

「……なんで、ここに？」

ようやく雁夜がそれだけ呟くと、

「あら。私がここにいちゃいけないなんて、誰が決めたのかしら？」

そう言って、雁夜のよく知る女性 結城静ゆいしずかは、艶然と微笑んだ。

雁夜は男の常としてその美しさに息をのみ、ついで舌打ちをする。

「何の用だ、結城。間桐を捨てた俺に、魔術師のお前が今さら会う理由なんぞ無いはずだ」

「あら、友人に会いたいただけなのに、家の名前が関係あるかしら？」
「それ、は……」

咄嗟には気の利いた反論ができず、言葉に詰まる。
そんな雁夜を静は呆れたように見つめ、首を振った。

「まあ、細かい話は後ね。まず逃げるわよ」

「は？ 何言ってる お、おいっ！」

雁夜は静に唐突に腕を掴まれ、引きずられるようにバーから出る。背後からは、我に返ったらしい人々の怒号が響く。が、もう遅い。驚くほどの速さで、静と雁夜は入り組んだ路地を駆け抜けていった。

「おい、待て、待てよ！」

「あは、あははは！ 楽しいわね、雁夜！」

雁夜は戸惑いながらも静を制止するが、静は止まらない。子供のようには笑いながら、走るのに不向きなはずのヒールで走り続ける。

「この……待てと言ってるだろうっ！」

止まらない静に業を煮やした雁夜は、掴まれた腕を使って逆につかみ返し、力任せに引き寄せる。

その拍子に、静が雁夜の腕の中に飛び込んだ。

「……っ！」

女性特有の柔らかさと、やや高めの体温、それに色気を感じさせるなにかの香水が鼻孔をくすぐり、雁夜は思わず喉を鳴らした。

男としての本能が、目の前の女性を求めていた。酒に酔って理性の箍が緩んでいたのもあった。

その直後、僅かな理性の揺り返しと同時に、猛烈な自己嫌悪に陥る。

(俺は今、なにを考えた?)

まだ自分には好きな人がいるというのに、たかだかこの程度の誘惑に負けそうな自分がますます惨めで

「雁夜」

呼ばれたかと思うと、首に手を回され、頭を引つ張られた。

そして、唇に温かい感触が伝わる。

驚きで見開かれた視界は彼女で埋め尽くされ、その美しい顔が驚くほど近くに見える。今ならば、その睫毛の一本一本まで数えられるだろう。

そのまま、どれほどの時間がすぎたのか雁夜には分からなかった。とにかく、一秒にも、一分にも感じる時間がすぎ 静は唇を離す。

「雁夜」

もう一度、名を呼ばれる。

一度目とは違い、雁夜は、その響きに込められた願いを、意図を、正確に察した。

時に、百万の言葉よりも雄弁な一言がある。これは正にそれだった。

そして、次に発せられる言葉もまた、これ以上ないほどに雄弁だった。

「来て」

乞われて、また腕を取られる。今度は優しく、導くようにゆっくりと引つ張られていく。

恐らく、ここで拒めば彼女は引き下がるだろう。この幻のようなやり取りは終わり、夢は覚める。尤も、今見ているのは悪夢なのか、それとも違うものなのか、雁夜自身にすら分からなかったが。

（駄目だ、俺は、葵さんが　　）

そんな思考が、一瞬だけ頭をよぎり。

同時に、つい半日前に見た、あのはにかんだ慎ましい微笑が脳裏に浮かんだとき

また、唇が合わさった。

最初のどこかプラトニックなものとは違い、口内に舌を差し入れられる。

蹂躪され、征服される。惑わされ、捕食される。骨と肉を通して直にその音が伝わり、快感と背徳感、酒気も相まって朦朧とした頭に、もう考える力は残っていなかった。

「……ぶはあ」

長く深い口づけを終えて少し離れた静が、舌で自分の唇を薄く舐める。

その仕草は、普段の誇り高くしなやかな女豹とは違った。獲物を絡め捕った女郎蜘蛛のようだ。あまりにも美しく、そして妖しい。

雁夜は目が離せない。

今度こそ、雁夜は手を引かれるがまま、まるで亡霊のように夜の帳に消えていった。

この夜、雁夜は過ちを犯す。
文字通り、一夜の過ちだった。
そして、たった一度きりの過ちでもあった。
しかし、その過ちが将来の間桐雁夜にとって致命的な重荷になる
うとは、当時の雁夜自身、思ってもいなかった。
そして来たる日、雁夜は最初のツケを払う羽目になる。

冬木市郊外、とある産婦人科クリニック。

こっそり中絶したいだの、駆け落ち同然の出来ちゃった婚夫婦だ
の、そんなひと癖もふた癖もある客ばかり見るということで、一部
の人間には有名な場所だった。

今にも夕日が水平線の向こうへと沈まんとする黄昏時、このクリ
ニックに一人の男が訪れた。

彼は、クリニックの前に停車したタクシーから脱兎のごとく飛び
降り、猛烈な勢いで走りだす。形振り構わず委細構わず、ただひた

すらに走る。

その勢いのまま乱暴に扉を開き、受付に物凄い剣幕で詰め寄った。

「すいません、連絡を受けた間桐です！」

息も絶え絶えになりながら、パーカーに薄いズボン、整える時間も惜しいという風情でくしゃくしゃにしたままの黒髪、という姿で疾走していたのは、間桐雁夜その人であった。

彼はフリーのルポライターとして生計を立てているために、ここ冬木市に戻ってくることはあまりなかった。現地に行かなければ記事が書けないのは当然ながら、それ以上にこの因縁と業と、一人の醜悪な老人の悪意が渦巻く地に留まりたくない、という嫌悪感が大きかった。もしも彼の実家である間桐の家が存在していなければ、なんらかの形で滅んでいれば、彼は冬木市に留まることを忌避しなかっただろう。

「はい、はい。一番奥の分娩室です」

雁夜が欲していた情報は、やや生温かい目をした受付嬢から、たったの一言と、廊下の奥に向けられた指で受け渡された。

通常、ここまで喧しく騒がしい客には一言くらいの注意もあって然るべきなのだが、事情を承知している職員は大目に見ている。仕方ない。誰だって 自分の子供が生まれるとなれば、平静を保つてなどいられないだろうから。

そんな仄かな思いやりなど知るはずもなく、雁夜は多くの焦燥と少しの混乱、そして微量の後悔を混ぜ合わせたまま奥へと突き進む。そして、最奥のドアを開く直前に、

おぎゃあああああ

「っ！」

そんな赤ん坊の泣き声が聞こえ、雁夜は思わず動きを止める。身が竦んだ、と言ってもいいだろう。

同時に、ほんの少しだけ安堵していた。我が子とその母親が、まだ恐れていた事態に陥っていないと分かったからだ。

しかし、それでも震える手でドアノブを掴み、握りしめる。

行かなければならない。この扉を開いて、その先にあるものを見なければならぬ。

この先にあるものこそ、己の罪の証であるから。

「……………頼む」

絞り出されるように零れた呟きは、まさしく懇願だった。

自分の一時の、短絡的な欲望によってこの世に産まれた子供が、父親の業によって鬻り者にされるなどという未来が訪れぬよう、必死で祈っていた。

そして、意を決した雁夜の手で、その扉が開かれる。

中には、医者も誰も、いなかった。

ただ、ベッドの上で上半身を起こした女性が、生まれたばかりらしい赤ん坊を抱いていた。

「……………遅かったじゃない」

そう言って雁夜を出迎えた静は、胸元に赤ん坊を抱きながら、憔悴しきった顔で、それでも笑っていた。

居候の難

「大丈夫かな、飛鷹……」

間桐雁夜は、日本に向けて飛ぶ航空機の客席で、呟いた。

かつて若かった雁夜も、今年で二十七歳。四捨五入すれば三十歳である。

体力や筋力はまだまだ衰えないが、時間の流れというものを感じ始めていた。

「もう十年……で、七年か」

自分が間桐の魔術を忌み嫌い、出奔してから十年。

自分の大事な息子が産まれてから、七年。

あの赤ん坊が、もう七歳になって、葵の娘たちと遊びまわっている。

それは、雁夜に父親としての自覚を呼び覚ますには十分だった。

父親となって、自分は変わった。そう、雁夜は思う。

その最たる例は、今もなお好意を寄せる幼馴染、葵への感情だ。

葵への焼けるような想い、その量は変わらずとも、それをある程度は制御できるようになった。

葵の他に愛するべき、そして愛したい人ができたからだ。

それこそが、最愛の息子 間桐飛鷹。

結城静との間に生まれた、正真正銘の一人息子である。

こことは違う並行世界 一般的に正史と呼ばれる世界の雁夜は、精神的にどこか子供のままだった。しかし、子供を持った親は成長

するものだ。

もう子供ではいられない。大人の男として、飛鷹を守っていかなければならない。自分一人の体ではなく、過ぎ去った恋に執着してはいられない。その思いが、この世界の雁夜に、人間的な成長を促したといえる。

さて、雁夜はルポライターという職業柄、遠いときは異国に向かうことも珍しくない。飛鷹が産まれてからは出来る限り冬木の近場で仕事をしていたが、今回はどうしても外せない仕事が海の向こうで持ち上がり、その間、飛鷹は葵に預けていた。

しかし、帰国は予定よりも一カ月ほど早い。飛鷹が唐突に熱を出したという報せを受けたからだ。なぜか熱は二、三時間ほどで引き、病院に連れて行っても異常はなかったが、大事を取って家で安静にさせているという。

もちろん雁夜はいてもたってもいられず、急ぎ帰国することとした。仕事も一応の区切りはついており、後は知り合いのライターに助けてもらえばなんとかかなりそうな出来に仕上がっていた。

雁夜は、窓の外に広がる暗闇を見る。

飛鷹。自分の一夜の過ちによって産まれた、望まれぬ子。

一時は、間桐の家に奪われるくらいならこの手で そんなことまで考えていたことを思い出す。なぜか手出しはされず、知り合いの魔術師に無理を言って飛鷹を調べてもらったところ、飛鷹が魔術回路を持ち合わせていないことが分かり、心から安堵したことを覚えてる。

おそらく、臓硯もなんらかの方法でそれを知り、さっさと飛鷹に見切りをつけたのだろう。無論、雁夜はそちらのほうが嬉しい。

自分が家を出奔したときに望んだもの、ささやかな幸せ。その全てを、飛鷹が満たしてくれていた。

だからこそ、一時的とはいえ高熱を出して寝込んだなどと聞けば、

雁夜は気が気ではない。

「飛鷹に、なにもなければいいんだけどな　　時臣なんか土産買
つてる場合じゃなかった」

やや不機嫌ながらも、正史の、あるいは飛鷹が生まれる前の雁夜
を知る者には想像もつかないほど、穏やかな口調。

雁夜を乗せた飛行機は、あと十三時間で日本に至る。

目を覚ましたのはいつのことだったか、そもそも目を覚ます前は
一体どこの誰でどのような存在だったのか、彼はもう覚えていな
かった。

ただ、目を覚ました時、自分は、間桐飛鷹と呼ばれるはずだった
唯一の存在と本来の自分自身が混ざり合って構成されたなにかだ、
と分かった。いわば混血ならぬ混心である。

まさしく子供のように奔放で、しかし無邪気な飛鷹の精神と、
ある程度まで成熟した大人の理性と知性を持ち、世の中の残酷さ
の一部を知る誰かの心が、混ざっていた。

それは、子供と大人を持ち合わせた、前代未聞の人間の誕生でも
あった。

「……あつい」

目を覚ました飛鷹は、薄く眼を開けた。

視界は明瞭なもの、頭の中が引つ切り無しに痛んでいた。熱は既に引いたが、それによって消耗した体まで、すぐに回復するわけではない。

とはい、窓の外では小鳥が鳴き、朝日の光が射しこんでいる。しかも他人の家で預かってもらっている身である。ここで起きないわけにもいかない、そう思い、ゆっくりと体に力を込める。まだ倦怠感があり、手足は重い、起き上がれないほどではなかった。

熱で寝込んでいた際の疲労で、体調は決して良くない。それでも起きないのは失礼な気がして、飛鷹は布団を除け、ベッドから降りた。この辺りに、大人の理性が垣間見える。

と、いつもと違う感覚に戸惑う。

(なんか……熱い?)

熱はもうないというのに、体の中に不思議な熱さを感じるのである。

不快な熱さではない。だが、一つ間違えば痛みに転化しそうな類の熱さだった。

コン、コン。

戸惑っていると、ノックが聞こえた。叩き方にも人柄が出るのか、

やや控えめなノックだった。

飛鷹もこの叩き方には覚えがあるので、さっさと許可を出す。

「どござ」

声をかけると、ドアノブが回り、ドアが開く。

「おはよう、ヒダカくん」

「ん……おはよ、桜ちゃん」

扉を開けて入ってきたのは、黒い髪に青い瞳をもつ少女だった。

名は遠坂桜　ここ遠坂家の二女である。

まだ五歳の彼女は、二つ上、つまり七歳である飛鷹を、どうやら実の兄のように慕っているらしかった。姉の凜がやや奔放にすぎる反面、大人の心からくる落ち着きが好ましいのだろう、と飛鷹はなんとなく思っていた。

「もう大丈夫なの？　すごい熱だったけど……」

「大丈夫、もうなんともないよ。心配してくれてありがとう、桜ちゃん」

「ううん、別にいいの。それより、朝ご飯できたみたい」

「そっか。じゃあ、すぐ行くね。あ、ひよっとして、ぼくを待たせてたりする？」

「あ、でも、つらそうだったら別にいいって、お母さんが」

「ごめん！　すぐ行くから、先に行つててー！」

「……うん。待ってるね」

桜が躊躇いながらも頷き出ていくなり、飛鷹はすぐにドアを閉めて着替える。

着替えは自分の家から持参した物である。手慣れた作業を一分ほ

どで済ませると、乱れた布団をさつと整え、廊下に飛び出て、全速力で居間へと走り出す。

まずい、凜に怒られる　そんな予感があった。居候の分際で食事に遅れてくるなんて云々と言われかねない。

凜も、昨日まで原因不明の高熱を出していた人間に突っかかるほど短気ではない。しかし、子供の早とちりと大人の知識を兼ね備えた飛鷹の思考は空回り、そこまで思い至らない。

そして、居間につながる曲がり角に差し掛かった時、反対側から誰かが歩いてくるのに気づく。が、止まりきれない。そのままぶつかる

「気をつけたまえ、飛鷹くん。廊下を走ってはいけないよ」

直前で、相手が飛鷹の肩を掴み、止めていた。

飛鷹は聞き覚えのある声に上を見上げると、予想通りの人物が、あまりよろしくない表情で立っていた。

深紅を基調とする服装に身を包み、確かな気品を感じさせる男性。立ち居振る舞いからその精神性も含めて、常に優雅さを忘れぬ、古き時代の誇り高き貴族のような人物。

そして、滅多に会うことはないものの、初めて出会ったときからの、飛鷹の密かな憧れの的。

遠坂 時臣であった。

「ごめんなさい、時臣おじさん」

「次からは、しないように。葵、それに凜と桜が待っているから、早く行きなさい」

表情の険を和らげた時臣は飛鷹の肩を優しく叩き、そのまま歩き去る。

飛鷹は暫しの間、その後ろ姿を憧れのこもった目で見つめる。

ああ、いつか、あんな大人に

「なにしてるのよ！ 早く来なさいよ！」

桜たちを待たせっぱなしだということに気付いたのは、背後から凜が怒鳴りつけてからだった。

そんな、いつもと少しだけ違う、遠坂家の朝の一幕。

居候の難（後書き）

原作改変その一・雁夜おじさんが雁夜パパにジヨブチェンジ。それにともない、精神が安定して、ある程度なら自律できるようになっています。

原作改変その二・時臣や葵との関係がやや良好になりました。言うまでもなく子供繋がりで。雁夜パパが丸くなったのも一因。まあ、原作と比べれば仲良くなっただけで、特に今でも時臣さんとは仲悪いですが、嫉妬心から時臣を毛嫌いするようないことはありません。

飛鷹について……現実世界で殺された誰かがとかではないのでその点をご安心を。というか、こいつに前世があるかどうかとか、あんまり考えてません。一応、それっぽい設定は考えてありますが、それはもっと後で出すことになるかと思えます。

裏話1・当主と父の狭間で（前書き）

こんなやり取りがありました。

裏話1・当主と父の狭間で

「お父さん、なに？」

夜、いつもなら寝る時刻に呼び出された桜は、不思議そうに私に問いかけた。

その姿も、仕草も、我が娘ながら可憐だ。

そして、その娘を魔術師の道に従って処することに、若干の抵抗を覚えてしまう。

目をつぶれば、脳裏に浮かぶのは凜と桜の遊ぶ姿。眠る姿。そして、傍にある葵。

あの景色から、桜がいなくなれば、さぞ寂しいことだろうな……。

「桜。今から私が言うことを、よく聞きなさい」

だが、私は意を決して桜に語りかける。

この子に与えられた魔術の才能は、あまりにも大きすぎる。

四十本を超える魔術回路の数と、生まれ持つ属性、架空元素・虚数。最愛の娘に与えられるには、少しばかり過ぎた代物だった。これほどの宝が捨て置かれるはずもない。一般人として生きることが望めない。

さらに言うならば、人の命を実験材料としてしか見ていない者たちから桜を守るためには……たとえば、魔術教会の封印指定から守るには……魔道の保護が不可欠だ。

「桜には、養子に行ってもらおう。間桐の下で、立派な魔術師として修業を積むんだ」

「よっし？」

「間桐さんの家の子になる、ということだ」

「え……？」

眼前の桜は戸惑いと、それに恐怖を隠そうともしない。当然だ、この子はまだ五歳なのだから。

心が痛まないではない。だが、子供の将来の幸せのために心を鬼にするのもまた、親の務めだ。

だが、目の前の桜はどうだ。その目には涙が浮かび、足が震えている。これが父親として正しい行為なのか？

……そして、このような私情は抜きに利害と信頼、古き盟約を守るのが、魔術師の家の当主としてあるべき姿だ。

心中に湧き上がった声を、私は容赦なく圧殺した。

父親としての私が消え、当主にして魔術師たる遠坂時臣が表に出る。

「わたし、捨てられちゃうの……？」

「そうではない。間桐さんの家できちんと修業して、良い子にしていれば、また会える。きつと会える。ただ、今は向こうにいることが、桜にとってはいいことなんだ」

私の懸念は、もう一つあった。

長女である凜には、桜に劣らぬ天才性がある。それは素晴らしいことだ。だが、これほどの天才が並び立つ家は不幸にしかない。それは歴史が証明している。そうして消えていった家は、時計塔の書物に数限りなく眠る話の一つとして、存在の名残を微かに漂わせるのみだ。

私は、遠坂家の当主として、それを防がなければならない。

近い将来、凜と桜が血で血を洗う家督争いを引き起こさぬと、どうして言えようか。

今は幼さから仲よくしていたとしても、これから先、決定的な亀裂を招かぬと、どうして言えようか。

私は、父親としても、それを見たくない。

「約束だ、桜。いつかまた、凜と葵と、一緒に過ごせる日が来る。だから、あまり私を困らせないでくれ」

「……………はい」

やや強い視線で桜を見ると、桜は涙を浮かべながら、それでも健気に頷いた。

桜が退出した後、私は椅子に座って大きく息をついた。年端もいかない娘にあのような話題を持ち出すのは、やはり堪えるものがある。

だが、これでいい。

今回の話は間桐から申し込んできたことでもある。貸しを一つ作ると同時に、間桐との盟約を再確認するいい機会になるだろう。

あの間桐臓硯を信用しているわけではない。だが、あの男が有能であり狡猾なのもまた事実だ。間桐の血から魔術が絶えかねない現状で、これほどの逸材を潰すような浪費はしないはずだ。

だが、万が一、そのような事態に陥った時　私はどうするのだろうか。

自問しても答えは出ない。

（だが、私は正しい。そうだろう、雁夜）

なぜ雁夜の名を出したのかは、自分でも分からない。
そうしてしばらく物思いに耽っていると、背後から足音が聞こえた。

ちらりと目をやり、誰かを確認するとまた逸らす。
その顔を、今は見たくなかった。

「……今日は冷えますから」

そういつて、私の背中に布をかけたのは、妻の葵だった。
柔らかな布が、冷気を少し和らげる。

この気遣いは、古き良き、貞淑な妻の手本のようだ。

しかし この気遣いの裏で、葵はどれほどの涙を飲んでいるのだろう。

断腸の思いで桜を養子にやった後、この家に幸せはあるのか。
愛する妻に、凜に、桜に、そして私にすら、その悲しみと罪悪感
は残り続ける。

これが、本当に最善なのか？

「葵。私は」

私は魔術師として正しいことをした。

私は親として、あの子のことを思っただけで済む。

今回の決断はそのどちらをも満たす。どこにも矛盾はない。
だということに、

「私は、間違っているのだろうか」

桜の涙が、どうしても瞼の裏から離れない。

桜に聞きはしたものの、その前から既に決断し、決定したことだ。間桐も合意している以上、今になって断ることはできない。なにもかも、取り返しのつかない段階まで進行しつつある……いや、してしまったのだ。私が、遠坂家よりも桜を尊ばない限りは、の話だが、なぜ、私はこんな無駄なことを聞いているのか。自分でもわからず、それでも葵の答えが聞きたかった。

「私は、遠坂葵。遠坂家当主、遠坂時臣の妻です。その決断の正しさを疑いはいしません。間桐にとっても、遠坂にとっても、これが最良です」

即答だった。

流れるように、模範的な魔術師の妻としての答え。

「葵、私が聞きたいのはそういうことではないよ。そう、間桐雁夜が取るだろう選択肢と、私が取った選択肢と、どちらが正しいと思っているのか……それが聞きたい」

間桐雁夜の名前は、先程と同じく自然に浮かんできた。

あの落伍者、間桐雁夜ならばどうするか？ 決まっている、養子になど出すはずがない。

たとえばあの男が間桐の魔術を継いでいようと、飛鷹くんとは別に子を設けていようと、その子を養子に出すことはないだろう。それが、魔術師の家としては間違った判断であったとしても。

私は、決してそれを正しいとは思わない。思わないが、ふと思う。

私が間桐雁夜のような男だったなら、はたしてどうなっていたのかと。

正しいことが、幸せであることを招くわけではないのだから。

「正しいのは、貴方です」

またも即答した葵は、そこで暫し逡巡し、

「……貴方も、雁夜くんと同じくらいの優しさを持っている。ただ、それを秘めているだけ。だから……そんなに、心を痛めないでください」

そう言って、私の手を握った。

温かい。

冷え切った私の手には、とても心地よい。

「貴方が桜のことを心苦しく思うなら、これを自分の罪だと思ったら、私も一緒に背負います」

葵の言葉と瞳には、今までにない真摯さと力強さがあった。

この全てが、いま私に注がれている。それだけで、心が軽くなる。

「時臣さん。貴方を、愛しています。」

「……ああ。私もだ、葵」

答えて、葵の手を握り返す。

私たちは、それから少しの間、互いの手を握り合って動かなかった。

裏話1・当主と父の狭間で（後書き）

原作改変その三・時臣のパパ度数が原作よりやや上昇。間違いなく雁夜パパの影響ですね。それに伴い、葵さんも自己主張するようになっていきます。十年後の凛の言葉を借りるなら、心の贅肉が増えたというやつですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4779ba/>

桐の枝に止まる鷹

2012年1月14日13時50分発行